
神殺日記-カンサツニッキ-

クロワッサン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神殺日記 - カンサツニツキ -

【Nコード】

N1028W

【作者名】

クロワッサン

【あらすじ】

商業高校に通う日暮樹（十六歳・無職・童貞）——何の取り柄もないヌルオタである彼の悩みは、クラスメイト四十人中三十九人までが何らかの異能力者であることだった。町中で繰り広げられるわりとどうでもいい戦いと、遭遇するたびそれを撥ねる幼馴染みの少女に頭を抱える日常。それにうんざりしていたところ、ひょんなことからクラスメイトの少年と、そのヒロインにあたるリリアが対魔活動を断念する。「世界が滅びてもいいの」という脅迫で後任を押

し付けられ、ライトノベルでいうなら二十五巻ぐらいのラスボス手前で急に異能力戦に巻き込まれる――。

最後のページまで何一つ不思議な力が発現しない、無情な現実を謳歌するエスケープアクション。

1・かろうじで虫の息

葛乃葉町、午後八時半。異能力を手に入れるパターンの主人公が、黒い影かなにかに追われてかけずり回るのにはちょうどいい時間だった。そんなことを考えながら、日暮樹は窓から広がる世界を眺めている。

昔ながらの長屋がたち上る市街には、なにやら白熱した異能力バトルが繰り広げられていた。「あばらを二本持つて行かれた!」とか「本当の力を見せてやろう!」だとかいう声がわりかし近くから聞こえてくる。結界とかそういう便利な技は使えないようで、戦闘の光景は周囲にダダ漏れになっていた。

樹のいる場所は食事処『西兵衛』の三階にあたる私室だった。とある事情で自宅を失ったため、幼馴染みの元に居候しているというわけだ。

いつも通りのドンパチに飽きて、PSPでもやろうかと思っていた矢先、後方で階段を駆け上ってくる足音がする。振り向くよりはやく、その腕が樹の方へと伸びてきた。

「黄昏れてないで注意しに行くよたつくん!」

「ああ、わかつグエエエエエエエエ!」

甚兵衛の襟、後ろ側をつかまれてかなり強引に連れられていく。自由を奪われた体がほぼ落下するように階段を下降、玄関扉の前でなぜかケツを蹴られて横転しかける。バアンと轟音をたてて玄関の引き戸が開いた少女が、怒気を込めて叫んだ。

「うるっさいよ もう、何やってるのこんな時間に!」

「……鑑水さん………ということはまさか……」

「エッ、お、エフオ、ヒュッ………あー………もう時間も遅いしな、静

かにしたほうがいいんじゃないか」

氣道を確保しながらばやいた樹。その姿を見て、手から炎を出していた中学生ぐらいの少年が声を張り上げる。

「お前は日暮樹……！！ クソツ、撤退だ！ 早く……！」

「しかし……！」

「あいつは女子供でも容赦なく八つ裂きにするぞ！」

「なんだと……！！！」

「しないですけどオ！！ やめてよわざわざ大声でそういうこと言うの！！！」

新幹線もかくやというスピードで異能力者たちが走り去り、誰も居なくなつた通りに樹の叫び声だけが虚しく反響する。辺りで争っていた暴漢や異能組織とやらの少女、果ては野次馬までが路地から一斉に消えていた。

「……なんなんだよ…………」

落ち込む樹の肩が叩かれる。振り向けばにこやかに笑う少女がいた。

やりみすきくり

た。その名を鑑水菊里といい、身長は百六十六センチと、樹よりコンマ五センチだけ高い。茶系統の割烹着に身を包み、頭には藍染めの三角巾を巻いている。目鼻立ちはすっきりしていてパーツがセクターに寄りすぎているようなこともなく、見てくれだけで点数をつけるのならほぼ満点に近いだろう。

「落ち込まないでたっくん。別にたっくんが不細工とか臭いとかオタクだから引かれてるわけじゃないよ」

「いや、わざわざ言うなよ。もしかしたらそうかもしれないって悩むだろ。そうすると眠れなくなるだろ。そして首を引っ張ったことを謝れよ」

「ごめんなさい。ついカツとなつて」

「それは許されざる理由だわ」

ただし性格は赤点という言葉ですら生ぬるいほど破綻していたが。

「まあそれはおいといて、とりあえず街を歩こうよ」

「なんでだよ……！！」

「たつくんが歩き回ると静かになるんだもん」

「恐れられてるの！ 誤解を加速させるだけだからやめてほしい！」

「……………さよなら、樹君のハードディスク…………『EG01』」

「……………それが、どうした……………」

「エロ・ゲーム？ エロ・画像？ なんの略だか分からないけど……

…手が滑ってぬか漬けにしちゃうかも」

「……………くそ」

しかたなく夜の街を菊里とともに歩き回る。

樹の登場に恐怖し、逃げ惑う人々たち。世界の命運からタイムセールの卵まで、いろいろなものを賭けて日夜戦っている異能力者たちがこのザマである。誰一人として樹と事を構えようとする者はおらず、人通りの多い場所に行けば行くほど、比例して悲鳴が大きくなる。

何故か目の前の通りから明かりが消えた。樹の存在を空襲か何かと勘違いしているのか、『明かりを消して息を殺せ』というのが一般的な樹対策であるらしい。

「なあ、キクさんよ。冒頭から主人公が街の人を襲ってるハナシを試みたことあるか」

「ないね。斬新だと思う」

「……………いやさ、重要なのは当人の心だよ」

「私は愉快だけど」

「俺は不愉快だよオ……………」

いつも通りのパターンだ。

吸血鬼だろうが異能力者だろうが幽霊だろうが、菊里の恫喝に驚き、樹の姿を見てはビビって駆けだしていく。

「覚えてろ——ゴッド・キラー！」

どこからともなく聞こえてきた声に、傾いたチューリップ・ハットを整えて樹は深いため息をついた。

身に覚えのない「神殺し」の肩書きは——いったいどうして、こんなことになってしまったのだろう。

2・一寸先も闇

ザ・ゴツドの朝は早い。なんと五時起きである。別に三文程度の得をしたいわけではなく、単に人通りの多い道を歩きたくないからという理由であった。朝っぱらから道行く人々に逃げられてしまうのは、精神衛生上非常によろしくない。

寝巻きの作務衣を、濃紺の作務衣（兼制服）に着替える。どこに差があるのかと問われると、そんなに差はないのだが、まあある種のこだわりと言えた。やや釣り目でシャープなラインが特徴的な眼鏡をかけ、首にはバカでかいヘッドフォンをかける。頭の上に乗っかる藍染めのチューリップ・ハットは、菊里の三角巾と同じ帽子屋で頼んだ特注品だ。

一階の玄関で朝刊をゲットして食卓に向かう。

「よう菊里」

「おはよう」

キッチンに立つ菊里が笑顔を見せる。

菊里はそれを越える四時半起きだ。食事の支度はほとんど彼女任せなのは、樹の料理がマズいからではなく、彼女の腕がプロ級だからというところが大きかった。実際に西兵衛の厨房を任されているため『プロだから』と言った方が正しいだろう。

最近「西兵衛」の支店が出来たため、父親は支店の方に出向いて従業員の指導中である。飲み屋としての傾向が強いため、どうしても夜操業になりやすく、母親は疲れているのかまだ寝ている。

三階建ての住宅だが、一階はほぼ全てのスペースが店に費やされているため、鑑水家の家族は二階で暮らしている。三階には樹と菊里の部屋がそれぞれあった。和風な作りのため全室に畳が敷かれて

いるということ以外には、特に言及するところもない。

とにかく今は鑑水家の構造など別にどうでもいい。現状の最重要項目はトイレである。

昨夜の事件の償いなのか、朝飯からカツ丼という、責めに責めたものをいただいたとはいいが、食い過ぎが祟って腹にきた。が、一つしかないお手洗いに行ってみれば、扉は固く閉ざされていた。恐らく菊里だろう。

控えめに二度ノックする。

「うんこなう」

「恥じらいを持てよ！ 溢れんばかり持てよ！」

「紙がない…… ツイッターで助けを呼ぼう」

「目の前にいる俺を頼れよ！」

トイレ脇の棚の下段からトイレレットペーパーを取る。それと同時にトイレの扉が勢いよく開かれた。

「ちよーだい」

「なんで扉を全開にした！？ ちょっとだけ開ければ済んだろ！」

「次からはそうするよ」

「次は紙を確認してから入れよ……！」

その後、なんとかトイレを済ませた樹はいつもどおり五時五十五分に家を出ることに成功した。朝六時の町並みは清涼な空気に満ちており、人通りも非常に少ない。菊里曰く、「たっくんの通学路を利用するひとが激減した」結果らしいが、なんとなく申し訳ない気分させられる。

葛乃葉町は随分と特殊な街だった。道路は一応舗装されているが、白っぽい砂利に見える特殊な素材で出来ている。お陰でそのまま時代劇の撮影に使えるような町並みをつくりあげていた。居並ぶ建物の多くは長屋や平屋で、ほとんどが瓦葺きの屋根を持っている。

道行く人々の多くが九割五分まで和服を着ているのも珍しいといえるだろう。甚兵衛、袴。法被はっぴを着た職人など、着ている本人たちが和装の意味をどこまで理解しているのかは知らないが、日本人特有の「空気を読む体質」というヤツか。

加えて、葛乃葉商業高等学校の制服は全国でも珍しい「和服」である。式典を除けば「和服」という縛りしかなく、どのチンピラかと思うような龍や鯉の刺繍があるうが、女子が膝上丈の浴衣を着ていようが大して注意はされない。寛容なのは悪いことではない。公立高校なのに無理しやがって、という感じだが、和服はなんだかんだで夏場も涼しく、下町情緒溢れる葛乃葉の町並みにはよくマッチしていた。学校で和服の着付けを完璧に習えるというのもマイナスにはならないだろう。また男子にとつては『ぱんつはいてない』だとか、上もつけてなかったりさらし巻いてるだけだったり、そういう神秘的な良さもあると樹は思っている。下着は和服用のものが存在するらしいが、あいにく樹は女性の生態系にはあまり詳しくない。詳しくないが、神秘的なのは悪くない。

平屋の集合住宅街の曲がり角まで来て、老人男性とふと目があつた。

おじいさんはさきほどまでハトにエサをやっていた手がガタガタと震わせ、右手のパン屑を噴水のように撒き散らした。ダダダダダという音は左手の杖が地面を秒間十六連射ペースで叩いていることで生まれたそれである。

「わ、わわ、わしゃわわしゃここくお怖くないぞぞぞオ！ わわワゲ——ゲエ、ガハッ、ガハッ、」

「……大丈夫か、爺さん………」

「死に損ないめ……」

「キクはなんで急に罵倒してるのよ！」

背中でもさすってやりたいところだったがそんなことをしたら吐血して死にかねない勢いだった。嫌われ者の我が身を嗤いながら、三割増しで寒風荒ぶ通学路をとぼとぼと歩いて行く。

「まあまあつくくん。現金出しなよ」

「元気だろ！？　なんで現金を出さなきゃいけない……！」

家が立て替え中で両親が街にいないということもあり、現在気兼ねなく話せる人間は鑑水菊里と、クラスメイトのスキンヘッドぐらいのものだった。誤解を解く解かない以前に話を聞いて貰えないことが多い。クラスメイトの女子数名に至っては、「おはよう」と言っただけで泣かれる始末だった。

とぼとぼと道をゆき、学校に到着する。商業高校と言っても特に面白い設備があるわけでもなく、校庭とプールが併設された至って普通の校舎である。建物は五十年の歴史の分だけボロく、年季が入っている。

「……登校中悪いけどちょっと彼を借りていくわね」

後方から突如としてロングヘアの少女が表れる。赤い髪とツンデレが特徴的な、興梠リリス、十六歳。クラスメイトであり、異世界からなんかよく分からない敵を倒しにやってきたという設定らしい。よく知らないが、薄手の紬つむぎは暗めの色調、花柄の横段模様だ。菊里には劣るが、ヒップラインは評価に値する。

「うん。返さなくていいよ」

薄情な幼馴染みに見捨てられた俺は、引きずられるようにして屋上の方へと連れて行かれる。残念ながら彼女には付き合っていると引き男性がいるので、恐らく告白されるわけではないだろう。

屋上の踊り場についたりリスが一呼吸ついた。俺はポケットからピッキング・ツールの束を取り出すと、手慣れた手つきで屋上の扉を開けた。

「あなた……悪魔ね」

「いや、違いますけど……。魔女狩りってこういうことを言うんだろうな……」

屋上には先客がいた。名を興梠雄介きんるゆうけいと言い、幼稚園で幼馴染みだった少年だ。浴衣は赤チェックでいかにも「今風」といった感じである。あらためて見ると童顔で女みたいな顔をした冴えないヤツだ

と思う。女（リリース。同棲中？）を作るまでは嫌いではなかったが、異能事件とやらに巻き込まれて以来は俺の敵と認識していた。なんでこのバカがこうもモテるのかと、届かぬ呪詛を呟き続ける。何が巻き込まれ型主人公だ。ヤクザ絡みの事件か、台風にでも巻き込まれている。

「また飛んで来たのか」

飛行能力を手に入れてからというもの、雄介は空を飛んで登下校していた。タケコプター感覚のようだが、敵対する異能力者に狙われて打ち落とされそうになっている場面もよく見かけするため、懲りないヤツだと言うほかなかった。

「……うん。日暮、お前に頼みがあるんだ。……俺の代わりに……魔神テュポーンを倒して欲しい」

こいつはヤバイ。朝っぱらからキている。本能が警鐘を鳴らしているが、苦い顔の俺に構うことなく雄介が口を開いた。

「おれたちはお前を列王会議の魔王討伐隊に推薦した」

「全容が掴めない。まず固有名詞が理解できない」

「今のお前は……昔のお前とは違う。でも、僕は日暮を信じてる。」

日暮なら、この街を見捨てたりしないって」

この押しつけがましい主人公的発想は何なのだろうか。疑問に思えど、雄介は一方的に喋り続けるだけだった。

「いや、お前はとうしたんだよ」

「正直に言っよ。……怖じ気づいたんだ」

「ふざけんな。なあ、お前この間言ってただろ。ライトノベルで言うなら二十五巻ぐらいの山場に来たって」

「……な、どうしてそれを知っているの!？」

わざとらしい驚き方をするリリースを睨み付ける。

「夜中にひとんちの前で叫んでれば誰にだって聞こえるだろ! うるさいんだよ毎日毎日!」

「なあ、日暮。冷静に考えたらさ、勇者って何の為に世界を救ってるんだろって思わない? 僕はもう、疲れたんだ……。誰が褒め

てくれるわけでもない。給料は良かったけど、でも、こんな仕事をいつまでも続けるのは無理だ」

悟りきった様子の雄介は相変わらずうざい。なら始めから安易に引き受けるなどいわざるをえない。

「……いや、リリースさんよ。主人公ポジションのこいつがこんなんでいいのか？」

「冷静に考えて、今の私じゃテュポーンは倒せないわ。……それに私の仇であった存在は、もう倒してしまったから。雄介と会うまでは全ての異形を憎んでいたけど、それじゃ何も解決しないって分かったの」

「いや職務を放棄しても何も解決しないですけどね」

「……後は任せた。幹部就任に異を唱える奴等が、日暮を暗殺しに来るかもしれないけど、頼んだよ」

「えっ」

何か重要なことを言われたような気がする。

「流星の日暮といえど、その身分を無下にすることはできないと思う。列王議會を完全に敵に回すのは、不本意だよね」

俺は『バカは放っておこう作戦』が早くも崩壊する音を確かに聞いた。何か脅迫に近いことをされているような気がする。恐らく俺の強さを勘違いしているが為に、「日暮樹ならこれぐらいは大丈夫だ」と思い込んでいるのかもしれない。

「大丈夫だよな、日暮」

大丈夫じゃない、問題だ。

「大丈夫だ、問題ない」

えっ？

後ろを振り返ってみればそこにはサムズアップをした幼馴染みがあった。ブン殴ってやろうと思っただけに拳に力を込める。

「私の趣味は極真空手です」

あぶないあぶない。冒頭から頭蓋骨陥没というのは情けなさ過ぎる。

「待て菊里。お前はこいつらの話を聞いてたのか」

「うん」

「……それで、何が大丈夫なんだ？ 大丈夫な要素あったか？」

「たつくんは最強の異能力者だつてこと、幼馴染みの私が一番よくわかってるから」

神妙な面持ちで唇の端を吊り上げる。器用なものだと関心したが、それとは関係なく顔面に膝蹴りを叩き込みたい衝動にかられる。

「俺が能力を持っていないことはお前が一番良くしってるだろ、キク」

「またまた。謙遜しちゃって。今日も朝ご飯を食べながら、クククさん我は闇を総べる王なり……」って言つてたのに」

「そつだよ日暮。そんなつまらない冗談はいらないよ。ただでさえ存在がつまらないのに」

「現状お前の存在が一番つまらないんだがア？ このクソニブチンボオイ」

「でもよかったわ。君が引き受けてくれて。もしダメだったら、私この街を滅ぼしてたと思う」

「引き受けてないん——」

言いかけて言葉を切る。今なんかとんでもないことを口走っていなかっただろうか。街を滅ぼすとはどういうことなのか。

「私の力じゃエンブリオにもテュポーンにも勝てない。だったら、この町を滅ぼして、奴等をここから追い出すのが一番……そう、全部滅ぼすのが一番なのよ……！！」

何が一番なのだろうか。世界の救い方を考えるときに「世界を滅ぼす」という選択肢は百番目にも入ってこないだろう。

「逃げればいいだろ」

「私に敗走は許されないの……！！ どうしてそういうの分かってくれないの！！」

「お前すげえめんどくせえな！！ 理論が破綻してるから！ なんと諦めから破壊に結びついた！」

「すまん……日暮」

「すまん日暮じゃないだろ！　なあ、こいつ完全にヒス入ってるだろ！」

「……俺さ、昨日病院に行ったんだ……そしたら、鬱病だったさ」

「……………」

「ごめんな日暮、早退するよ……今日も貧血気味なんだ」

そういつて二人の姿が空気に溶ける。移動魔法が何かだろうか。思ったより事態は深刻らしい。

たしかに深夜に叩き起こされて異能力者を退治しなければならな
いというのは辛いだろう。中学生のころは「異能力者とかカッケー」
と思っていた俺でさえ、今は絶対に関わりたくないというのが本心
である。遊びや余興で命を張ったりできるものか。

「……………なあ、菊里。どうするつもりだ？　あいつらが苦労して
るのは分かるさ。……分かるが、俺とお前で何ができるって、い
うんだよ」

無力を嘆き、振り向けば。

——後ろには誰も居ない。

俺は泣いた。

3・心折設計

十時半まで学校の机に座っていた俺が家についたのは十一時を少しまわったところだった。

八時四十分にはおかしいと思い始め、九時十分にはクラスメイトがみんな教室移動してしまったのだと考えた。十時になって警察への通報を考え、十時半に後ろの黒板に「今週の第二土曜は休日です」の張り紙を見つける。

そして家へ帰る。店の裏口から二階へあがり、今は居間で菊里を尋問しているところだ。

「なあ、キク。学校休みだったんだが？」

「そうだよ。先週言ってたじゃん」

語気を強めたつもりだったが菊里は予想以上にしれっとした態度だった。卓袱台越しに睨み付けてはみるものの、キクは手元の『ザ・殺人術』を読むのに忙しいようだ。

「なぜにキクは学校に行ったのか？」

「私は先生に呼ばれてたからだけど」

「俺はお前の用事に付き合わされたのか？」

「付き合ってたじゃない」

「どうして伝えてくれなかったんだ？ 伝えろと言われなかったとかそういうのナシな」

「たつくんをおちよくるのが面白いから」

「あまり私を怒らせない方が良い……」

俺は違和感を覚えて言葉を切った。だとすればあのクソアベックがやってきた理由は何だったのだろう。

「……待て、待てよ。どうして便所コオロギペアは俺が来るって知ってたんだ？ お前まさかとは思うがたつくんも連れてく的な約束

をしてないだろうな」

「してないよ。ニヤルラトホテブに誓って」

「そいつは邪神だな。邪神以外の神に誓おうな……おい、お前が今隠した細長いモノはなんだ。芋ようかんに見えたが」

「……プラレール」

それは苦しい。

「正直に言えたら二本やるよ」

「私がやったの！！ 悪い！？ はやく芋ようかん寄越して！！」

「何もかもがおかしいよお前！」

とりあえず何を二本やるかは決めていなかったの（芋ようかんを買う金がなかったため）、秘蔵のたくあんと4Bのデッサン用鉛筆をあげることにした。本人はまんざらでもないようで、切り分けたようかとたくあんを食べている。

どうせ自分一人で一本平らげるのだろうと思っていたが、きちんと俺の皿にも配分されていた。

「……ちゃんと俺の分もくれるんだな」

「飴と鞭」

「自重しろよ。そして俺のようかんの方が薄いんだが」

「もー、そういう因縁つける」

「いや……裏側の世界が透けてみえるんだけど……？」

障子紙のようなヨウカンが自立していることに一抹の感動を覚えつつ、俺は体を壁に預けた。なんだかどつと疲れた気がする。ちなみに菊里のようかんは十五センチぐらいあり、小皿からは両端が盛大にはみ出している。流石に食い過ぎだろ。

ふと、部屋の隅に紙束が存在することに気がついた。普段から読み終わった新聞を溜めている場所なのだが、今日に限ってはそのタワーがあまりにも高すぎる。

「……なんだこの古紙の山は。資源回収に出すのか？」

「なんかさっき興梠君が来て押し付けていったよ」

「断ってよ！ むしろ殴れ！ 強く殴れ！」

「いや、でも結構重要な書類だったりするかもしれないじゃない？
そうそう、とりあえずコレをまず読んで欲しいって」

「……封滅会本部………なんじゃこりゃ」

『あなたを封滅会東京支部・テュポーン討伐業務部に任命します。
ついでに封滅会幹部補佐官に任命します』

「は？ は？ え、意味わからないんだけど。ついでにじゃないだ
る死ねよ」

「あらら、やられたねえ。公式の書類じゃん」

「……ウソだろ………」

「ごめんねー、私が余分なことを言わなければ、冗談で済んでたか
もしれないのに……」

菊里が口の端を吊り上げる。悪役か貴様は。

「ええ加減にしないと口では言えないような事をするぞ」

「アフリカの部族の踊りとか？」

「発音的な意味じゃねえから！」

先ほどから頭痛が痛い。ヒートアップすればするほどさりと流
してくるため、あまり力まないようにはしているのだが、どうも調
子を狂わされてばかりだった。

「放置しとくと罰金があるみたい」

「は？」

正義の味方に罰金とはどういうことだろうか。いや、しかし、だ。
契約を結んだ訳ではないので、放置しておいても大丈夫なのではな
いか。しかし、詐欺の一種で「実際に裁判所からの書類が来る」タ
イプというものもあるらしく、それは放置しておくで詐欺をやられた
側が敗訴する仕組みになっているらしい。なぜ。

「ガラの悪い取り立ての兄ちゃんがオラオラって来たら、詰むんじ
やないの」

「………」

「まあ、諦めなよ。でもほら、書類が来るだけマシかもよ。世の中
のライトノベルなんていきなり巻き込まれたー！ ってヤツばっか

りだし」

「でもあいつらいきなり異能力の素質があるじゃねえか……実は父親がなんちゃらか、どうせそんなヤツばかりだろ！　可愛い女の子も一緒に手に入るし、俺とは状況が違くないか……」

「まあたつくんはほら、この街のオチ担当みたいなのところがあるから」

「……もう飛び降りようかな」

「首つりの方がラクだよ」

「引き止めるよ！」

「でも封滅会に捕まって拷問にかけられたり、テュポーンのレーザーに焼かれたりするよりいいかもよ」

「……あれ、自殺というカードを切るのはあながち間違っていない気がしてきたぞ」

お先真つ暗である。しかしこんなことで諦める俺ではない。来週の漫画雑誌、来月のゲーム、来期のアニメなどが俺の自殺を踏み留めさせる。とりあえず突破口を探さなければならぬので、思いついた質問を菊里に投げかけた。

「お前もこういう組合的なサムシングに加入してたりするの？」

「ううん。全然。結界師は基本、自分の殻に引きこもるのがお仕事だからねー。怪しげなセミナーみたいなのは開かれて、たまに参加したりするけど」

「へえ……」

「助力を頼もうつてのは無理だと思うよ。だれもたつくん何かに関わりたくないもん」

「………いや、誤解されてるから、だよな。その言い方は傷つくからやめろ」

「うふ」

「うふじゃねえよなんだよ」

「まあ、建設的な案を出すとすれば、とりあえずその書類の山にでも目を通してみるとか」

菊里の指が指し示す方向には代わり映えのない書類の山がある。

中三の夏休みに出た宿題の二十倍はあるように見えた。

「マジで言ってるん？」

「何かあるかもしれないよ。トイレで芳香剤の裏にある注意書きも読んでるんだから。たつくんはデスクワークで糸口を見つけてよ」

「いざとなったらお前が何とかしてくれるのか」

「ムリダナ。どう考えたって私じゃ勝てないよ」

「……それで良くクラスで大見得きったよな」

「被害を受けるのは私じゃないから！」

「くそつたれええエエ！ こんな時も強くは出られない居候の身分が憎いぜ！ あとさ、気になったんだけど、お前を百とするとテュポーンってどのくらいなんだ」

「二万ぐらい？」

「……………俺は」

「五、とかじゃないの」

「なに、俺の四千倍も強いのか？ どうしようもないじゃん」

「どんなゲームでもそうだよ。最初から強い人なんていない」

「ラスボス手前で引き継ぎ喰らったんだけど……！！ スタート地点が魔王城の目の前の毒沼だぜ！ くそつたれ！」

「いいから目を通してみなよ。逃げちゃ駄目だって」

「またもグーサイン。イライラが加速していくが、このまま火をつけるわけにもいかないと思い直し、とりあえずぺらぺらとめくってみることにする。」

役に立ちそうなものはほとんどないのだが、どの書類もツツコミどころがあって中々読み応えがある。当事者になってしまった今は、楽しさも半減というものだが。

イチオシはこの封滅会への勧誘漫画だろう。普通の少年だった主人公が、ヒロイン（封滅会所属）と出会って一人前の異能力者になる話だ。

放課後の屋上。異能力者になったせいで成績が下がってしまった

主人公が、夕焼けを眺めているシーン。背後のドアをぶち破ってヒロインが登場する。

《部活と勉強と異能力者を両立できるのよ!》

無茶苦茶である。クラスメイト達はよく異能力を保持し続ける気になると思う。

《あなたの周りの異能力者たちもみんな封滅会に入ってるわ!》

「ウソつきやがって」

《この異形、封滅会で習ったことがある敵だ!》

「……………」

《みんなも封滅会でハッピー異能力者ライフを——》

「うおおおおおおおッ エエエエアアオ!! シャーッ

!!」

荒ぶるソウルを燃やして叫ぶ。ゲームのコントローラーを一度も投げたことのない俺ですら我慢ならない——そのくらいクソな内容だ。

「どうしたのたっくん急に書類を引き千切ったりして」

「ロクな情報がない……!」

「でもその漫画は面白かったよね」

「読んだのかよ! 読んだなら読む前にクソだって教えてくれ!」

「いや、私の徒労感を味わって貰おうと思って」

「いらねえよそんな配慮!」

「それ使って今から2チャンネルでスレ立てようか。封滅会のパンフがクソすぎるんだが、って」

「そんなヒマねーから!! 俺の命ピンチだから! そこ、わかってる!?!」

「タツキが死んでも代わりはいるもの……」

「かけがえのない命ダカラ!」

「アナタノコトガ、ダイスキダカラ!」

「話聞けよ!」

会話がバキバキ折れていく。フウメツカイ(?)とやらに任命さ

れて未だ実害はなかったが、公式書類が送付（？）されてきた以上は、テュポーン（？）を何とかしないと列王会議（？）にやられてしまうのかもしれない。

とにかく単語が理解できない。あたりまえだ。漫画でいうなら四十五巻ぐらいで「お前主人公やれよ！」という状況だ。努力もなけりや友情もない。ちなみに俺は女もないし金もない。

「それで、どうする？ 逃げるの？」

「いや、逃げるのは無理だろ。……待てよ、一度テュポーンに会ってみるつても手かもしれないな」

「え？」

「だってそうだろ。封滅会の方をなんとかしたっていいわけじゃん。別に俺はそんなおっかない『魔王』と戦う必要はないんだよ！」

「じゃあ封滅会の方と戦うの？」

「ああ」

どうせ正義の味方といったらアンパンマンかスーパー戦隊みたいなヤツだろう。出し抜くのは容易に思える。

「ちなみにエンブリオの魔力はしよばいけど、相手を社会的に抹殺するのが得意よ」

「正義の味方じゃないの！？」

「系統分類上は彼も魔族なのよね」

「……………意味がわからない」

「一つはつきりしてるのは、どれを選んでも地獄ってことね」

満面のドヤ顔は吐き気を覚えるほどだが、ここで俺の黄金の右をぶち込もうとした場合、高確率で野球ができない肩にされてしまう。ここは下手に出た方が得策だろう。いままで十五年間そうしてきたように……。

書類の中から『極秘資料』と題されたA4の紙を発見し、それに従ってチャリを飛ばすこと十五分。

魔王の根城はそう遠くない場所にあった。周囲を墓場に囲まれたホテル跡である。

工事現場を仕切る鉄柵に囲まれた敷地内には、廃車や家電製品の類が山積みになっていた。地元でも有名なジャンクヤードである。

ちなみにどうしてこんなところにホテルが建つことになったのかというと、バブル期に葛乃葉の雄大な自然に目をつけたどこぞの社長が建てようとしたらしい。バブルが弾けたときにホテルの建設も立ちゆかなくなったが、デカイホテルのお陰で潰すのにも金がかかるということ、現在はそのまま放置されているというわけだ。

それ以外はあまり言うことのないホテルだろう。ラブホを五倍ぐらいのサイズにしたような、安っぽい西洋風の外見以外に見るところはない。かつては地元の不良連中のたまり場と化していたが、暇を持て余した警官が不良を補導したり説教したりして遊び始めてからは人気がなくなった。

ちなみに通報したのは俺だ。スクールカースト上位にいるような茶髪の不良を見ると血が騒ぐのだ——社会的に抹殺しろと。

「それで……ついてきてくれたのはなんでだ」

門扉の前でチャリを止める。うち捨てられたパチンコ台に座っているのは俺の幼馴染みである。着替えるのが面倒だったのか制服のままだ。

「うん。暇だったしね」

「そうかい……」

そこで俺は重大なことに気がついた。彼女は結界師じゃないか。

「そうだよキク！ 結界を張ればいいんだ……そうすりゃ、安全だろ！？」

「言われなくったって、分かってる。大丈夫、危なくなったら張るから」

「おう、頼りにしてる」

自作の力ギ縄（忍者が使うヤツ）を門扉に引っかけて、昇る。腕力不足でウンウン唸りつつも、なんとか敷地内部に侵入することが出来た。隣の菊里は結界で『板』を作り、その上を踏んづけて余裕そうに門を越える。

ホテルのドアはご丁寧に鍵がかかっていたが、お得意のピッキングでさつと開ける。

「なあ」

「なに」

「ここまで疑問に思わなかったんだけどさ、魔王ってこんなところに住んでるの？」

「うーん……どうなんだろう。魔界からきて、ほら、戸籍とかがないのかも」

「……すげえ大変そうじゃん。周囲が毒沼で、四天王がいて……とかじゃないの？」

「日本人だって武家屋敷で使用人が一杯の家なんてないじゃん。結局、フィクションでありファンタジーでしょ」

「さいですか」

扉を開く。こういうのはファーストコンタクトが重要だ。ちなみに書類によると、敵はロビーにドンと構えているとのことだ。

中は明かりがなく、窓からの光もほとんど入ってこないためになり暗かった。正面に魔王らしい姿を捉え、とりあえず口を開く。

「お前がテュポ——」

言葉に詰まる。

終わった。全て終わったと、確信した。

渦巻く巨大な蛇のような下半身は大型のタンクローリーほどの太さがあった。胴体から突き出した六本の腕は広げれば教室程のサイズがあるだろう。全身を覆う鱗は大型の爬虫類か、あるいは恐竜のそれにも似ている。

とにかく——やたらとデカかった。

十メートルぐらい上方に西洋龍のような顔と、能面のような顔が

二つついている。いや、三つか？ 裏面にも顔がありそうなので、もしかしたら六つぐらいついているのかもしれない。

醜い、というのは少し違う。神々しさすら漂わせる「異形」だった。

オタク脳の俺としては可愛い女の子（十四歳くらい、ツインテール、素直クール）を想定していたが、現実是非情である。人間サイズですらない。

「いかにも、私がテュポーンだ……」

どこか掠れた、しかし重厚に響く声。そこにはたしかに『魔王』らしい威厳があった。

どう見ても勝てません本当にありがとうございました。

とりあえず結界を張ろう。菊里に目配せをすると、彼女が小さく頷いた。

「封神結界……個人用、スモールサイズ」

ヴィン、という効果音と共に薄い水色の膜が――

「オオオオオオオオオ！？ 個人用！？ えっ、お一人様！？」

「悪いなタツタ……この結界は一人用なんだ……」

「誰がタツタじゃ！！ ふざけんな！ おいふざけんな！ ふざけんな！」

「五・七・五」

「うっぜ！ そのカメラは何だよ！」

「ニコニコとユーストリームで生放送。『幼馴染みが魔王に挑んで死んでみた』」

「縁起でもねえよ！！」

「貴様ら話を聞いているのか！！」

「あっ、おう、マジごめん」

なに言ってるの俺。

魔王にタメ口はマズいよね。九メートルぐらい上にある目玉（赤く光っているぞ！）が俺の方をギョロギョロと睨んでいる。こんなに怖い体験したのは初めてだ。

「初めまして、日暮樹です」

テンプレートに挨拶から。付随するお辞儀も最敬礼、完璧である。クールジャパン。ワビ・サビ・モエだ。

「……貴様……！！ゴッド・キラーか……！！」

うるたえるテュポーン。そしてうるたえる俺。俺の誤解された厨スペックはもつとローカルなものだとはかり思っていたが、どうやら魔王にも通じるらしい。やったね。押し切れるか？

「いかにも」

と、いかにもそれっぽい返事をする。騙くらかしいならこちらに分がある。生まれてこの方、嘘だけで生き抜いてきた男は伊達じゃない。

「……確かに私はお前には勝てないかもしれない。だが、私の全身全霊をかけた一撃ならば……あるいは。上位の異能力者も一撃で消し炭にできる威力、お前に傷一つぐらいは、与えられるかもしれない。あれれー、おっかしいぞー。予想できない展開ではないが、ちょっと目の前でチャージみたいのを始められるのは凄く困った。あたら余裕で死ねるだろう。なんか凄い青白い光がバチバチ言っている。多分最小出力でもバツチリ蒸発するだろう。」

「待て」

俺は震える喉から声を絞り出した。魔王の動きが止まる。

「話をしにきたんだ」

「今更対話か？ 無意味だとはね除けてきたのはお前達ではないか」

「……もとはと言えば、列王議会の奴が問題だった」

完全にアドリブである。『悪あがきのタツ』と呼ばれた実力を見せてやるうではないか。

「奴……？ はて、誰のことだ？」

さて、誰のことでしょう？

樹は背中がじつとりと汗ばんでいくのを感じていた。

だがしかし。

だがしかし、だ。

日常会話で幾度となく使ってきた「にわかな知識しかないけどし
ったかぶりをして自尊心を保つ行動」（通称ニワカシツタカ）の本
領発揮はここからと言えた。

「聡明な貴方は、何となくアタリがついているんじゃないか……。
列王会議の中でも、とりわけ強欲で軽薄な、」

目の前で少し弱まるバチバチフラッシュ（青）。しかし全身のダ
ラダラ汗は留まることを知らない。
スウェット

「まさか、風の——」

「そう、風の」

「風のエンブリオ」

「その通り、風のエンブリオ」

テュポーンの巨大な目が圧力をかけてくるが、涼しい顔でそれを
流す。ビビったら負けだ。風のエンブリオという人物に聞き覚えも
見覚えもないが、あわよくばそいつに全責任を転嫁し——必要があ
れば目の前のテュポーン側につくというのも一考の余地がある。正
義というのは勝者であり、生存者なのだ。

だから『風のエンブリオって最悪だよ』というツラをしろ、日
暮樹！

俺ならできる！

睨み合うこと二十秒。テュポーンが哄笑しはじめる。

「面白いものだな！ 列王会議で推薦されたお前が、エンブリオを
批判するとはな！ 内部で漏らせば極刑モノだろう？」

「えっ」

「どうかしたのか？」

「……いや、フフ、何でもない」

どうやら列王会議とかいうものはわりかしデンジャラスなコミュ
ニティーのようだった。エンブリオ批判は公の場ではしないほうが
好ましいようだ。わりとテュポーンがノってきちゃっているので、
もう少し情報を集めたいところである。が、極刑モノというフレー
ズが頭にこびりついたまま離れない。

「どうした、大丈夫か」

「だいたいじょうぶだア」

声が震えている。加えて上擦っていた。泳ぎまくっている目は金メダルが狙えるスピードである。

「僕は今のやりかたに疑問を感じている」

それでも舌先三寸、口八丁は止まらない。ゆけ、日暮樹。

「ほう」

「暫く僕に任せておいてくれないだろうか。……見返り、という言い方が適切かどうかは分からないが、貴方の提示する条件がのめるかもしれない」

「お前の提示する条件……？ ふざけているわけではなかるうな。

……お前ほどの武闘派が、どうして対話を試みる？」

「その方が面白いからさ」

「……鬼畜な奴め……。封滅会も、私も、恐るるに足りぬ——
そういうことか……」

「そのとおり」

今のは自分の口からじゃないぞ。脇を見れば、いつも通り幼馴染みが失言をしていた。顔を向ければグーサイン。いつか殴る。

「いや、そういうことじゃな——」

「敗北を知りたい」

「黙ってるよ……！！ いい加減に黙ってよ！！ 頼むから！ さつきまで静かだったじゃん！」

「PSPの電源が切れた」

俺は右ポケットからチュッパチャップスを取り出して放り投げた。高すぎたか、と思ったが、菊里が二メートルぐらい飛び上がったきつちりキャッチする。これで暫く持つだろう。

「傲岸不遜な奴め」

「いや、テュポーンさん！ 喋ったのは隣の女だから！」

「む？ 女連れか？」

こいつは何を言っているんだという疑問がわき上がってくる。実

は菊里が男だつたりするのだろうか。彼女の方に顔を向けてみれば、いつになく真面目な表情でテュポーンの方を睨んでいた。

「……さつきから微動だにしないよね」

「たしかに」

菊里と一緒にテュポーンの方に近づいてみる。暗いこともあり、遠目でみると恐ろしげだった体も、触れる距離まで寄ってみれば安っぽい素材であることが認識できた。少なくとも生き物ではない。

……まさか、ハリボテ？

「……あれ？　なんか、階段が………」

よく見ると裏側半分は未完成だった。所々、金属の骨組みが露出している。

「……む、おい、こらっ！　近づくてない！！　地面に赤い線があるだろうが！」

言われて振り返る。確かに地面には赤いテープが貼ってあった。

「ごめん見えなかった」

「いいから、下がれてば！　いいかげんにつひゃああ！！」

「あん？」

暗くなった視界。上を見上げてみれば、なんかふってきてる最中であつた。なるほど、暗いのは陰になっていたからか。しかしもう回避は間に合わない。

「オッヴェア」

思い切りぶつかった。痛みに耐えかねて地面を転がり回る俺と、それに巻き込まれて地面に倒れる少女と、それを眺めながらチュッパチャップスを舐める菊里。

「もっとちゃんと、受け止めんか！！」

「無茶言つなよ！」

頭をさする少女の姿を見て思い出す。こいつ、クラスメイトにいなかっただろうか？

「お前は……えっと、スモウ……スモウ……」

「周防だッ！」

金髪ツインテールでロリロリした見た目の少女である。顔立ちはアジアと西洋のハーフっぽく、ヘーゼルの大きな瞳が美しかった。身長は百四十センチちょっとといったところだろう。発展途上の薄い胸とはいえ、金魚が泳ぐ可愛い浴衣にはよく似合っている。「くそ……ゴッドキラーといえど、姿を見られた以上……仕方がない……」

「落ち着け落ち着け、周防」

「クッ……余裕だな！ 貴様っ、さすがは……このっ」

「いや、大丈夫。口は固い方だから。それに俺はもうエンブリオ打破プランで行くつもりだから」

「なぜだ……！ 私など、取るに足らないと……そういうことか！」

「どうしてそんなに焦ってるんだよスオウ！ 大切なクラスメイトと戦いたくなんてないだろ！」

「なっ、なにをいっとるか！ わけがわからん！」

「ちょっと顔が赤くなった気がする。可愛い。」

「どうせ蹴落とすなら見知らぬ他人の方がいい……そういうことだよ」

「クズめ……！」

「ねえ、動画撮ってないで助けてよキク」

「メンドイ、舐め終わってない」

「……正直なヤツだな」

それから周防、正式名称・周防璃按すいおんを説き伏せるのに三十分がかった。煮え切らない女だと思っただが、怒っている様子が可愛らしかったのでまあ良しとしよう。エンブリオ（相変わらず詳細不明）をなんとかするという方向性を確認した後、廃ホテルを後にした。

4・武装法師

ゴッドキラーの朝は速い。

今日の場合は寝る前に茶を飲み過ぎたことが原因だった。時刻は午前五時、寝直すには微妙なタイムだったので、眠い目を擦りつつ居間を目指した。

「……？」

ふと、窓が目にとまる。カーテン越しに朝日が漏れているのだが、その陰が一刻一刻変化しているのだ。まるで窓の外に何かがいるのかのように。

近寄ってみてカーテンを開けた。

ギョロリと、一つ目の巨人がこちらを睨む。

「窓に！！窓に！」

ヴォアアアみたいな声が聞こえてくる。窓ガラスにガンガンと手形がついた。グール、ドラキュラ、一反木綿、デューラハンから化け狐まで。まるで古今東西の化物大戦争や。

騒ぎ立てているうちにキッチンの方から菊里が顔を出した。

「どうしたの？ ああ、敵が来たんだ。あはは」

「どういうことよコレ！？」

「いやホラ、ム力ついたんじゃない？　なんで新米のたつくくんが封滅会の幹部に任命されたんだー、って」

「今すぐ譲り渡したいです」

「無理だよ。境界越しじゃ会話もできないし。たとえできたとしてもやらない」

「なんで！？」

「なぜなら面白いからです」

「ぶつとばすぞ！ すっげ怖い！ すっげこわいんだけど！」

「強く生きる。聖域の眷物踏んでモンスターハウスの中にいるようなものだから安心していい」

「わかりにくいわ！」

「じゃあ、ガラス越しにサメを見てる水族館感覚」
アクアリウム

「……………いや、明らかに攻撃的な意志を持つてるんだけど。というか俺は最強の異能力者ってフレコミじゃなかったの!？」

ヴェアアアという叫び声がする。ガンガンと叩かれる窓、一角獣の口から吐き出される緑色の液体。窓につけられた手形の数は十や百ではきかないだろう。

「だからアレでしょ。たっくん程度の名前じゃビビらないビッグネームと、そんな相手でもブツ殺してやるっていうイカれたヤツが集まってるだけだよ」

「考え得る限り一番ヤバイラインナップじゃんよ！」

「まあ、私の結界を信じなよ。結界師業界じゃ引きこもりのヤリミズって呼ばれてるんだから」

「嫌な二つ名だな…………」

「とりあえずご飯にしようか」

菊里が炊きあがったばかりの白米を茶碗によそう。よく焼けたシヤケに、豆腐とわかめの味噌汁。温泉卵は俺好みのかつおだしのタレがかかっていて、夕食にも出た煮物はよりよくダシが染みているようである。小皿にとられた黒豆は、市販パックのそれとは違って甘さを控えめの一品だ。

最高の朝食である。

…………窓の外にバケモノもがいなければ、だが。

「攻撃したいのに攻撃できなくてメシがウマイ」

菊里はケロっとしていた。別にこういう事態に慣れっこという訳ではないのだろう。単に肝がすわっているだけだ。

「鉛みたいな味しかないんだけど」

「ウソでしょ。私の料理だもん。おいしいよ」

「……うん。おいしいよ。うん。ごめん。死にたい……」

とりあえずメシはうまい。俺も単純なもので、五分もすると窓の外の方々はどうでもよくなってきた。実害がないのなら放置しよう。リアクションを取って体力を浪費するよりは健全と言えた。

「なあ、登校中はさすがに結界張ってくれるんだろ」

「ええー……」

露骨に嫌そうな顔をされて俺は面食らう。何かこいつに悪いことをしたのだろうか？

「お願いします。もし断るなら俺学校行かない。今日は一日、お前の下着を漁ったりして遊ぶわ」

「たっくん、自分が最ッ低のクソ野郎だって自覚はあるの？」

「コオロギよりマシだ」

「そう……ま、いいよ。別に断る理由もないし。下着見られるのは嫌だし」

「そついや同棲してるのに一度もぱんつを見てないな」

「もうそろそろこの話はやめてもいいのかな」

「ごめんな。続けようぜ」

「……………」

最終的に菊里に無視される。ちょっと顔を赤くしていてかわいが、一線を越えた場合は俺の顔が（出血的な意味で）赤くなる可能性を孕んでいるため、引き際を見極めることが大切と言えた。

作業衣やヘッドフォンやチューリップハットといったマイ・コスチュームを身にまとい、菊里を待って玄関に立つ。程なくして現れた菊里が、おもむろに手を伸ばしてきた。

「なに？ 手相を見せようとしてブツ叩くってドッキリ？」

「いや、手を握ってって」

「……どうしたんだ急に。気持ち悪いぞ」

「結界ってそんなに広域には張れないの」

「ああ、さいで。なんだよ、もつとこう、らぶりーな話かと思った

ぜ」

「手を放したら多分死ぬから」

そうですね。結界が途切れたら、後ろからついてきてる百鬼夜行の皆様にはブチ殺されますよね。わかります。

これはスリル満点のお化け屋敷みたいなものだ、自分にそう言い聞かせながら、なるべく無心になろうと精神を統一させる。

「……………」

手を握っていることも、妖怪に襲われていることも——今は、その全てを忘れよう。そう考えていた矢先に、菊里が急に脇をくすぐってきた。加えて手を振り払おうとしてブンブンと腕を振り回す。

「えっ、ちょちょちょあえ！！ あぶないから！！ なにやってんの！？」

「手が滑った」

「滑りすぎ！ 危ないから！！ 殺すつもり！？」

後ろの異形の奴らが舌打ちをした。『ブチ殺ス……チャンス……』といううめき声が聞こえてくる。非常にいただけない。

「今悩んでるところ」

「悩みどころないから！ お前俺のこと嫌いなのか？」

「大好きだけど」

「……あー、あ？ ……あ、そういう感じっすか……へー、へへっ」
こういうストレートな物言いは苦手だった。たとえそれが朝の反撃だと分かっているとしても、彼女がそんなことをハナクソほどにも思っていないとしても、ちよつとドキリとさせられる。

ふと、遠くから何か音が聞こえてきた。左方向に目を向けてみれば、耳をつんざくようなエンジン音と共に、ハーレーのトライク（三輪バイク）に跨がった法師が姿を現した。

「おい、バカ——！」

制止の声をあげるが、すでに遅かった。異形の群れに突撃したハーレーが、奴らのことごとくを轢いていく。当人は涼しい顔をしており、良心が痛むというようなことは微塵もないらしかった。そし

て急ブレーキ。異形の群れを肉片に変えながら、法師は颯爽と地面に降り立った。

身長百九十五センチ、僧服に身を包んだスキンヘッド。『数珠代わり』と称するガトリングガンのベルトを肩にかけ、背中にはガトリングガンの電源ユニットを背負っている。右手に鈍く光る回転砲は、通常はヘリや戦車に装着するタイプのガトリングガンである。

その二つ名は《武装法師》——武田^{ただあつがい}毆鎧がそこに、いた。

ちなみに十六歳の人間が大型バイクの免許を取れるわけもないため、当然のように法律は守っていないが、細かいことは気にしないのが慈悲深き僧侶……らしい。

「コノ、キ。ガイハゲ……！」

「これはすまない。よく見えなかったのだ。とりあえず、お前の骨を墓標代わりにしようと思う。赦してくれ」

こいつは何をいつているのだろうか。菊里の発言がおおむね冗談なのに対し、この男は十割が本気だ。一言でいうとヤバい人種である。回転するガトリングガンの先に刃がついたそれを敵の体に差し込んだ。汚い火花があたりに散るが、そんなことはお構いなしに虐殺を続けていく。異形の方々は「コア」を潰されないと死なないタイプが多いらしいのでなんとか生きているとは思うものの、とりあえずいい加減に止めないと周囲の人から「またゴッドキラーの仲間が町を破壊している」と誤認されかねない。

「やめるオウガイ！ もういい……！」

「親友に仇なす愚か者は、全て肅正すべきだ！」

「またゴッドキラーの一味が町を破壊しているわ……！」

「た、たすけて……」

「佐藤さん！ さとうさああああん！ 違うから、俺じゃないから！」

クラスメイトの佐藤さんが涙目で走り去っていく。明日の学校も愉快なことになりそうである。

「チッ……時……い……殺……ら、する、そ……聞け、ヒ……シ」

「えっ！ なに言ってるんだ！？ ガトリングガンがうるさい！」

「ハゲではない！！」

「言ってるねえよ！！」

爆音の中、殴鎧が口を開く。殴鎧たちクラスメイトの男子（俺と興杵を除く三名）が調査を進めてくれたお陰で、このくそつたれた陰謀の裏側が見えてきたのである。

「な、なんだって……！？ つまり、テュポーンが封滅会に狙われているのは、内外からの『これだけ平和なら封滅会って必要なんじゃね？ 事業仕分けの対象じゃね？』という意見から目を逸らすためで、彼女が実際に何かをしたわけではないということか！ 加えて、興杵雄介が俺を裏切って風のエンブリオの座についただと？ 要するに今回の一件は全て、興杵雄介と興杵リリスの自作自演で俺は巻き込まれた被害者……体よく生け贄にされてしまったかわいそうな男、そういうことだな！ 奴らは俺を部下という形にすることで、周囲の人間に示威したかった、そういうことか……！」

俺は全てを理解した。こういうのは普通、主人公の立場である俺がいろいろ調査したりしなくちゃいけないのだろうが、生憎俺はそういう面倒なことが大嫌いである。

「その通りだ。ついでに言っと奴らは、今晚にでもこの町の支配権を手に入れるつもりだ。急ごう、時間がない、尺もない」

「分かった」

そのまま菊里がトライクの後部座席に乗り込んだ。

「……俺の席は？」

「コナン君、君はこのスケートボードをバイクにくくりつけて……」

菊里がスケートボードを持っていた。

「何で持ってるんだ！？」

「いや、こんなこともあるとかと、さっき外の物置から出したの」

「無理だよ！！ 何もかもが無理だよ！」

「ずべこべ言ってる場合じゃない！ お前が奴らを止めなければ……」

…この町が障気に包まれることになる……」

殴鎧がいつになく真面目な表情でそう語り、拳を壁に打ち付けた。伊藤さんちのブロック塀が吹っ飛んで粉々になる。

「そうすると、どうなる……？」

「地上デジタル放送が見られなくなる」

「ふざけるなよ……！　今日は三本もあるんだぜ！？」

興梠が説得に応じるかどうかは分からない。だが、アニメが見られないのなら、死ぬのと変わらないだろう。俺は決心してスケートボードをバイクにくくりつける。

「行くぞ……！」

「ああ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1028w/>

神殺日記-カンサツニッキ-

2011年9月7日03時23分発行